

第41回新潟癌治療研究会

日 時 平成2年8月4日(土)
午後1時30分より
会 場 新潟東映ホテル(朱鷺の間)

一 般 演 題

1) Small cell carcinoma が疑われた上顎癌の1症例

野村 務・大竹 克也 (新潟大学歯学部)
鈴木 一郎・河野 正己 (第一口腔外科)
新垣 晋・中島 民雄

今回上顎に発生した悪性腫瘍で小細胞癌が疑われた症例を経験したので、その概要を若干の考察を交えて報告する。

症例：52才，男性。昭和59年外科担当医より右頬部の腫脹を指摘されるが、自覚症状がないためそのまま放置、その後右顔面部に軽度自発痛、知覚異常を認め、鼻出血も出現したため、昭和62年5月7日当科紹介来院。

病理組織所見および電顕にて SECRETARY 様 GRANULE が認められ、全身検索にて異常所見がないことから、上顎原発の小細胞癌が疑われた。化学療法、放射線療法にて腫瘍は縮小するが、平成1年6月左側頭窩下の腫瘍が右側と同様の組織を示し、転移または再発が疑われ左側に化学療法、放射線療法施行。現在腹部への転移が疑われている。

2) 当科における過去15年間の悪性腫瘍患者の臨床統計的観察(非上皮性悪性腫瘍患者について)

成田 保之・土川 幸三 (日本歯科大学新潟歯学部)
加藤 讓治 (第二口腔外科)

過去15年間に当科を受診した、WHO で定める上皮性悪性腫瘍とさらに白血病を除いた、いわゆる非上皮性悪性腫瘍患者について臨床統計的観察を行なった。その結果32名、32症例で、顎口腔領域全悪性腫瘍の9.3%であり内訳は悪性リンパ腫15例、悪性黒色腫6例、横紋筋肉腫3例、悪性線維性組織球腫、軟骨肉腫、多発性骨髄腫各2例、線維肉腫、平滑筋肉腫各1例だった。性別では男性20名、女性12名、当科初診時平均年齢は、男性48.7才、女性58.3才であった。主に軟部組織腫瘍については、数回の生検にもかかわらず確定診断を得るまでの期間を要した。治療法は、悪性リンパ腫では放射線と化学療法が、その他の症例では、外科療法を基本とし、悪性

黒色腫では、免疫療法を積極的に施行していた。その結果、非上皮性悪性腫瘍全体では、Kaplan-Meier 法による5年生存率は44.1%、粗生存率42.1%であったが、疾患別では悪性黒色腫の平均生存期間は323.5日であった。

3) 口腔領域への転移性腫瘍

鶴巻 浩・星名 秀行 (新潟大学歯学部)
坂井 広也・大橋 靖 (第二口腔外科)

最近16年間に経験した他領域からの口腔転移3例について報告した。症例1：71歳，女性。初診：昭和51年10月26日。既往歴：4年前に胃癌(腺癌)で亜全摘を受けた。現症：5～7に肉芽様の腫瘤を認める。組織診：分化型腺癌。症例2：78歳，男性。初診：昭和60年4月24日。既往歴：6ヶ月前に胸部中部食道癌(扁平上皮癌)で放射線治療を受けた。現症：右顎角部が小児手拳大に腫脹。CTにて右内外側翼突筋、咬筋部に腫瘍を認め、骨には吸収なし。組織診：低分化型扁平上皮癌。症例3：74歳，男性。初診：平成元年5月12日。主訴：右顎角部の無痛性腫脹。CT所見：右下顎枝は膨隆し、腫瘍実質を含む。生検にて分化型腺癌の像を得、尿検査所見から泌尿器科受診させ、前立腺癌の転移と確定診断した。除手術を施行後、下顎枝の膨隆は縮小。CT所見で同部は石灰化が著明に進行し、また嚢胞様となる。同部の生検で腫瘍細胞を認めない。経過観察中。

4) 膀胱癌細胞の増殖能に関する研究

谷川 俊貴・富田 善彦 (新潟大学泌尿器科)
西山 勉・佐藤昭太郎 (新潟大学泌尿器科)
本山 悌一・渡辺 英伸 (同 第一病理)

我々は BrdU の膀胱内投与により、移行上皮癌の増殖能を検討したので報告する。膀胱移行上皮癌にて膀胱全摘術を施行された症例を16例を対象とした。方法は膀胱内に BrdU 500mg を生理食塩水 50ml に溶解投与し、膀胱摘出後腫瘍部及び正常部を、70%アルコールにて24時間固定後パラフィン包埋し抗 BrdU モノクローナル抗体を用い免疫組織化学染色した。この標本上で標識率(LI)を算出し、また標識細胞の分布、部位について検討した。移行上皮癌 grade 1, 2, 3 の LI はそれぞれ平均6.05, 13.6, 21.65%で、標識細胞は grade 1, 2 では基底層から中間層にみられ、grade 3 では全層に認められた。また乳頭状腫瘍では間質の血管内皮にも標識細胞が認められ、発育様式への関与がうかがわれた。